じょうほう通

インド滞在雑感*

横 島 聖 一**

Report from one of Japanese in India now*

by YOKOSHIMA Seiichi**

キーワード インド, 海外, 市街, 電気, 生活, BRICS

はじめに

BIRCSの一角として特にここ数年世界中から注目される世界最大の民主的国家とも言われるインド。日本の約9倍の国土面積を有し、中国について世界第二位の人口を抱える国。仏教発祥の地であるものの現在は国民の8割がヒンズー教徒である一方で、地域レベルでの公用語だけでも18言語もある多言語国家。筆者は2011年7月よりこの色々な一面を見せるインドの首都ニューデリーに隣接するハリアナ州のグルガオンに赴任して、まもなく1年が経とうとしています（6月執筆時時点）。

ここでは、グルガオンに駐在して感じた今の「インド」の断片を皆様にご紹介します。

グルガオンという街

グルガオンは、ニューデリーの南西に隣接し、首都ニューデリーと商都ムンバイの1,400 km間を結ぶ大動脈であるNH-8と呼ばれる国道沿いにあります。このNH-8沿いには、マルチスズキが1980年代に進出したマネサル、JETROが日系企業の誘致を勧めているニムラナ工業団地といった街・地区が続いています。グルガオンには旧市街地もあり、駐在員が赴任後にまずお世話になる外国人登録事務所や警察などの役所やマーケット、クリケット場などが集まっています。一方で開発地区は、外観は現代風のオフィスビルやショッピングモール、また20階建てほどの高層アパートが建ち並ぶ地区です。これは我々のような海外からの駐在員だけでなく、インド人の間でも共通の認識のようであり、インド国内の他の都市でもグルガオンという

都市の名前を出すと、「デリー空港のそばの新しい街」などとすぐに判ってもらえます。まだまだ建設途中のアパートや商業ビルも沢山ありますが、建設が始まってから2年、3年と経っているものもあり、いつになったら出来上がる

図1 当社が入居しているオフィスビル
入居が始まって2年位だが、内装はまだ完了していない。

図2 グルガオン開発地域遠景
この埃にかすむ風景が、現実です。（特に乾季）

*原稿受付 平成24年6月15日

** 株式会社神戸製鋼所 溶接事業部門 Kobe Steel Ltd, Welding Business, Kobelco Welding India Pvt. Ltd

のか、不思議に思います。さらにその隣にはホームレスの人達が集まる空地があり、まさに「悠久の時」の中にたえずむインドの今を象徴する一つの風景かもしれません。

現地の電力事情

一口にインドといっても、ムンバイ（旧ボンベイ）やチェンナイ（旧マドラス）、コルカタ（旧カルカッタ）といった都市圏、また地方都市や農村部など、州や場所によって事情が大きく異なります。この国での生活については、様々な情報が様々なメディアで伝えられているので、ここでは少し視点を変えた形で電力事情についてご紹介します。

当社はまだ「もの作り」を行っていませんので産業向け電力の供給状況については実情が判りませんが、事務所を構えているグルガオンでは、一日に数回から十数回程度の停電があります。短くて数秒から長くて数分程度です。ビ

ル自身が自家発電設備を持っているため、あまり長い時間停電することは通常はありません。当然プリンター等は止まってしまうので、印刷途中であればやり直しとなります。PCについては停電対策の意味も含めてデスクトップ型ではなくノート型が主流であり、サーバーを導入している場合にはUPSの設置が必要不可欠です。

慢性的に電力供給力が不足しているインドでは、沢山の発電所建設計画があり、日本の重工、重電関連の企業も多く参加しています。一方で街中では不思議な光景を目にします。例えば電信柱ですが、一箇所に十数本が集まって立っていたり、その電信柱が垂直に立てられていなかったりしています。また、人が集まっているところでは、電信柱や電線に沢山のケーブルが絡まるように配線されている光景が多々見られます。発電効率や送電ロスといった技術的な話は勿論ですが、モラル・マナーといった面でもまだまだ改善の余地があるように思います。

図3 新興地区の一角
やたらと電信柱が多い場所

図5 グルガオン旧市街の風景
やたらと電線が多く、どれが正規の工事なのか不明です。

図4 4系列ある送電線
系列毎というよりも電信柱毎に全て傾いている

図6 グルガオン旧市街の風景
細いケーブルが沢山付け加えられているように見えます。

図7 商店街にある鉄工所（グルガオン旧市街）
写真中央の鉄柵が溶接構造物です。図面もなしで作っています

図9 ある問屋の店先（ムンバイ）

図8 ムンバイの鉄鋼問屋街の風景

溶接事情

アーク溶接に限れば、需要全体の6割以上が被覆アーク溶接といわれています。もちろん外資系を中心に新規投資の続いている自動車関連ではソリッドワイヤが主体です。エネルギー関連ではサブマージアーク溶接やバンドによる肉盛溶接、またフラックス入りワイヤによる溶接施工が行われています。

一方、街中を車で走っていると商店街の一角で溶接している店を見ることがあります。店の内装工事をしているのではなく、そこ自体が小さな鉄工所であり、鉄柵やなにかの架台を手作りしています。ときおりバイクやオート3輪

を横倒しにしてフレームの補修溶接をしていることもあります。工業製品を大量生産する、という事にはあまり向いていない国民性を感じることがありますが、一方で手作りの一品物はなんとなく作り上げます。但しその仕上がり具合については忍耐が必要なが多いようです。

またムンバイには、広大な問屋街が残っており、製品分野毎に街を作っています。溶接材料の専門店街はありませんが、鉄鋼、ステンレス鋼の問屋がメニューとして持っています。問屋街とはいうものの倉庫街ではなく東京・秋葉原のようなイメージのほうが合います。全ての店がナンバリングされていて数百社あると聞いています。店先に鉄筋や形鋼などを置いており、小売販売店舗兼問屋といったところのようです。

溶接施工の効率化、日本では当たり前のことですが、インドではまだまだこれからようです。

おわりに

赴任地にて実感した「今のインド」の一部を紹介させて頂きました。世界最大の民主的国家とはいっても、様々な分野で規制が残り国営企業が多く、また州政府の権限が強く地方により全く別の国のような対応を求められたりと、なかなかスムーズに物事が進まないこともまさに「インド」という国の実情だと思います。しかしながら13億人の人口を抱える国が発展へと動いている姿には、力強さを感じることができます。当社は産業の基盤を支えている「溶接」という分野にて、日本ブランドとしてのプレゼンスを高めていくよう活動していく所存です。